様　式　Ｆ－１９－２

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　　元 年　　６ 月　　１ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）
研究期間：2016～2018
課題番号：１５ＫＫ０１３０

研究課題名（和文）ポストウェストファリア体制の国家像の模索：欧州辺境の未承認国家の比較研究から（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Considering the Nation's image in the Post-Westphalia era: A comparatiev study of Unrecognized States in Remote Resions of Europe(Fostering Joint International Research)

研究代表者
廣瀬　陽子（Hirose, Yoko）

慶應義塾大学・総合政策学部（藤沢）・教授

研究者番号：３０３４８８４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,000,000円
渡航期間：　12ヶ月

研究成果の概要（和文）：　未承認国家問題を、同問題と密接な凍結された紛争と絡めながら比較検討する本研究の主軸をなすのは、フィンランドのヘルシンキ大学アレクサンテリ研究所での在外研究である。同期間中、ドイツのIOSを拠点にした「サイレント・コンフリクト」に関する共同研究にも参加した。
共同研究を通じ、欧州の未承認国家の捉え方や脅威感を理解できたと共に、同問題を考える上でのハイブリッド戦争の意味や 「安全保障のジレンマ」理論での分析など、新たな研究の切り口を得られたことは極めて有益だった。同問題の分析手法が、クリミアや北方領土など領土問題にも部分的に適用できることから、今後の研究対象が拡大したことも特筆すべきだろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の学術的意義は以下の通りである。第一に、欧州の未承認国家の捉え方や脅威感を理解できた。第二に、ハイブリッド戦争の検討の重要性が明らかになった。第三に、本課題を「安全保障のジレンマ」理論による分析など、新たな切り口で分析する試みができた。第四に、未承認国家の分析枠組が他の領土問題にも部分的に応用可能であることがわかった。第五に、欧州とアジアの未承認国家問題は異なる論理で考えなければならないことも明らかになった。
社会的意義として、戦争・平和研究で新たな視点を展開できたこと、また北欧を中心とした欧州の研究者との研究協力基盤構築により、日本の研究の国際化に貢献できた意義も大きいと考える。

研究成果の概要（英文）：　This research has been aiming to make a comparative analysis of the "Unrecognized States" issues while considering the “Frozen conflicts” that are deeply related to Unrecognized States. This joint international research has mainly been carried out at the Aleksanteri Institute, University of Helsinki, Finland. In addition, I participated in joint research on “Silent Conflicts” at IOS, Germany in the same period.
Through the joint research, I came to understand the European perception and fear of Unrecognized States, and found the importance of “hybrid warfare” when analyzing Unrecognized States and the effectiveness of security dilemma theory to analyze Unrecognized States. These are extremely useful areas for this research. Moreover, I found that the analysis tool of Unrecognized States can be applied in part to certain territorial issues such as Crimea and the Northern Territory; this discovery will expand the scope of future research.

研究分野：国際政治、旧ソ連地域研究、比較政治

キーワード：未承認国家　凍結された紛争　ハイブリッド戦争　国家承認　グランド・ストラテジー　地政学　狭間の政治学　安全保障のジレンマ

様　式　Ｆ－１９－２

１．研究開始当初の背景

国際政治学は、長らくウエストファリア体制、すなわち国民国家を中心とする見方を基にして成立してきた。しかし、国家や国家に準ずるものの様態が多様化し、さらに国家承認の基盤となってきたモンテヴィデオ議定書もほとんど形骸化している。そこで、本研究では新しい国家像や国家承認のあり方を検討するために、欧州地域の未承認国家（非承認国家と称する場合もあるが、本研究では未承認国家と呼ぶこととする）を多面的に比較検討することにより、世界を不安定化しうる未承認国家問題の現状を明らかにするとともに、その事例から、ポストウェストファリア体制時代の国家像を模索し、新たな国際政治の理論を構築することを目的とし、文献研究および現地でのフィールド調査の両面からのアプローチにより研究を進めてきた。

本課題については、科学研究費若手研究（B）にて、平成 24 年度に開始し、平成 27 年度に終了という予定で進めてきたが、平成 26 年に一応のまとめといえる単著『未承認国家と覇権なき世界』（NHK 出版、2014 年）を出版し、大きな良い反響を得たことから、本研究が成功裡に進んできたことを実感していた。しかし、同書を出版して改めて明らかになったことは、未承認国家問題は解決が極めて困難であり、その研究には終わりがないということであった。しかも、2014 年から深刻化したウクライナ危機により、新たな未承認国家問題も生じる状況を研究期間中に目の当たりにすることとなった。そのため、未承認国家問題の解決を模索するだけでなく、未承認国家や分断国家が生まれる契機となる「凍結された紛争」の誕生・存続のメカニズムを明らかにし、その発生をいかに予防し、また解決できるのかを検討することが重要と考えた。「凍結された紛争」とは、国家間の戦争や地域紛争、内戦などが、武力を用いた戦いを経て、停戦合意などによって武力衝突は基本的になくなっているものの、紛争の原因となった問題そのものは解決されていないため、停戦状態が固定化されている紛争のことを意味する。そして、「凍結された紛争」は「未承認国家」や「分断国家」に直結する。実際、「凍結された紛争」そのものの先行研究はほとんどない。このことからも、「凍結された紛争」が未承認国家と不可分であることは間違いないが、「未承認国家」の研究も決して十分になされてきたわけではない。

そのため、未承認国家の比較検討および、ポストウェストファリア体制時代の国家体制の模索と新国際政治の理論構築を進めながら、その研究を補完するために「凍結された紛争」についての研究も深めるため、科学研究費・基盤研究(C)（特設分野研究）「凍結された紛争：その予防と積極的平和の模索」（H27～H31）を申請し、採択され、研究を進めている。

また、比較研究を充実させること、新しい国家体制の検討や国際政治の理論構築のためには、より広い視野や視線の議論が必要だという考えから、国際的な研究協力にも尽力してきた。研究協力の相手については、本研究が世界でもっとも進んでいる北欧諸国および本研究の震源地である旧ソ連諸国の研究者が最適だと考え、また、日本の政治学が主にアメリカの研究に倣ってきたこともあり、新たな見地を開く上でも北欧諸国の研究者との連携は日本のアカデミズムに新たな刺激をもたらしてくれると考え、近年は、特に北欧諸国との研究者との連携を進めてきた。

２．研究の目的

上述のように、過去に採択された科研費（若手(B)「ポストウェストファリア体制の国家像の模索：欧州辺境の未承認国家の比較研究から」）をさらに発展させるために、「凍結された紛争」の研究も並行して深め、未承認国家の比較研究のみならず、未承認国家の解決や予防についての研究を、国際共同研究により、新たな見地も取り込みながら深めることを目的とした。

また、近年のウクライナ情勢などから、未承認国家（およびその予備軍）問題の国際政治へ

の影響がより如実になったことに鑑み、改めてポストウェストファリア体制時代の国家像の模索およびその理論化の必要が急務となっていると考え、当該問題の研究の深化を進めることも重要な目的であった。その上で、政策提言を行い、日本および世界の平和に学術的に貢献できることを目指した。

３．研究の方法

本目的を達成するためには、未承認国家問題を研究する諸外国の研究者との連携が必須であると考えた。また、「凍結された紛争」の予防や解決を考える上では、平和研究の視点が重要となる。これらの条件を極めてよく満たしているのが、北欧の研究者である。北欧諸国では従来から平和研究が盛んであり、未承認国家研究が世界で最も進んでいるのも北欧で、申請者の未承認国家研究の基礎も北欧の研究者による書籍や論文で構築されてきた経緯がある。加えて、北欧の近隣諸国であるバルト三国、とりわけエストニアでも未承認国家研究は盛んだ。エストニアは旧ソ連諸国であるという歴史的経緯や自国もロシアと今尚深刻な問題を抱えていることからも、旧ソ連の紛争や未承認国家問題は自国の安全保障にも大きく関係することから、熱心に研究がなされている。そのため、滞在するフィンランドを中心とした北欧の研究者と議論を進め、研究を深めた。

加えて、未承認国家問題そのものの研究も深めていく必要を重視していることから、文献による研究と、紛争当事国でのフィールド調査や当地の研究者との研究協力によって、未承認国家問題を多面的に検討する作業も進めた。

これらを総合する形で、研究成果を発表し、それに対するコメントや疑問を得ることで、さらに研究内容を見直し、より深い研究を積み上げてゆくという研究方法をとった。

４．研究成果

従来の国際政治学では捉えきれないものであるにも拘らず、地域・世界を不安定化してきた「未承認国家」問題を、未承認国家問題とは切り離せない「凍結された紛争」の問題の検討も深めつつ、様々な事例を比較しながら明らかにしてゆくことを目指した本研究において、国際共同研究は極めて有益であった。

本研究の主軸をなすのが、フィンランドのヘルシンキ大学アレクサンテリ研究所で 2017～18 年に１年間行った在外研究である。その間、同研究所のハンナ・スミス研究員（後に、フィンランドの欧州ハイブリッド脅威対策センターに異動）と共同研究を進め、また、ドイツの IOS を拠点にした「サイレント・コンフリクト(凍結された紛争と同じ現象を指すが、参加研究者で議論をした結果、最適な用語だということになった)」に関する共同研究にもスミス氏と共に参加した。

共同研究を通じて得られた成果は以下の通りである。

第一に、欧州からみた「未承認国家」の捉え方や脅威感を理解できた。特に、クリミア併合とその後のウクライナ危機、そしてそれに伴う、新たな未承認国家とも言えるドネツク人民共和国とルガンスク人民共和国の誕生は、欧州に大きな危機感を与え、欧州においてロシアが未承認国家政策においても多用してきた「ハイブリッド戦争」に対抗することの緊急性を生み出すこととなった。この欧州ならではの問題認識は、本研究を進める上で極めて大きな刺激となった。

第二に、上記の点とも絡むが、未承認国家研究においては、ハイブリッド戦争の検討が極めて重要であるということも明らかになった。ハイブリッド戦争は、ロシアのクリミア併合、ウクライナの東部の危機への介入の中で、特に注目されることになったが、ロシアはハイブリッ

ド戦争をかなり前から多用しており、それはソ連時代にも多々使われてきた手法である。ソ連解体後は、旧ソ連の未承認国家問題の進展の中でも必ず使われてきた手法であり、その分析が未承認国家の誕生や変化を見る上で極めて重要であることが明らかになった。そして、ハイブリッド戦争の研究は、ロシア外交そのものを検討することにもつながり、未承認国家問題をより多角的かつ包括的に研究する上でも極めて有益であることもわかった。そこで、ハイブリッド戦争の研究も精力的に進めており、ハイブリッド戦争に関する単著を執筆する準備も進めている。

第三に、「未承認国家」の問題を「安全保障のジレンマ」というロジックで分析するアプローチなど、新たな研究の切り口で分析する試みができたことは、共同研究の賜物であった。モルドヴァの「沿ドニエストル」という未承認国家のウクライナ危機後の状況を、安全保障のジレンマを使って分析する論文執筆を進めてきた（廣瀬の担当分は執筆済みだが、スミス氏は 2017 年秋の転職によりスミス氏担当分の執筆が滞っているが、なるべく早いタイミングで論文として発表したい）。

第四に、未承認国家を分析する考え方が、未承認国家以外の領土問題、例えば、ロシアに併合されたクリミアや日本の北方領土問題にも適用可能な部分があることがわかり、未承認国家の分析枠組を用いることができる対象が拡大したことも大きな進展だと言えるだろう。実際、北方領土問題についての研究はかなり進めており、いずれクリミアなども含めた形で、領土問題と未承認国家を包括的に考える研究も行ってゆきたいと思っている次第である。

第五に、欧州の事例とアジアの事例を比較することにより、アジアの未承認国家問題は欧州のそれとはかなり異なる論理で考えなければならないことも明らかになった。アジアでは、歴史認識や歴史背景が特に重要な要素であることから、歴史ベースの分析がより有益となることがわかった。

以上のように、国際共同研究にて多くの成果を得ることができた。すでに書籍、論文、学会や国際会議での口頭発表などで、成果発表を精力的に行ってきたが、今後も引き続き研究成果を形にし、さらに研究を発展させてゆく所存である。

５．主な発表論文等（研究代表者は下線）

〔雑誌論文〕（計 16 件）

① 廣瀬　陽子、ロシアによるハイブリッド攻撃の脅威、治安フォーラム、査読無、25 巻 4 号、2019、pp.34-42

② 廣瀬　陽子、2018 年のアルメニア政変とその余波、国際情勢、査読無、第 89 号、2019、pp.83-92

③ Yoko HIROSE, International Cooperation in the Arctic Region: The Search and Rescue and the Barents Cooperation, *Eurasian Journal of Social Sciences*, 査読有, 6(4), 2018, pp.37-55
DOI: 10.15604/ejss.2018.06.04.003

④ 廣瀬　陽子、「ロシア化」強まる北方領土　経済協力で局面を打開できるか、ウェッジ、査読無、2018 年 10 月号、pp.38-40

⑤ 廣瀬　陽子、南コーカサスと「狭間の政治学」、JFIR World Review、査読無、Vol.01、2018、pp.49-60

⑥ Yoko HIROSE, Japan-Russia Relations: Can the Northern Territories Issue be Overcome?, *CSIS[Center for Strategic and International Studies] Strategic Japan Working Papers*,

査読無，2018
https://csis-prod.s3.amazonaws.com/s3fs-public/180402_Strategic_Japan_Yoko_Hirose_paper.pdf?hyrXAqS45pW4vaKWsrE7ZNbqvbfICkwN

⑦ 廣瀬　陽子、ウクライナ危機の長い影：ロシアと NATO、国際問題、査読無、No.667、2017、pp. 15-26
https://www2.jiia.or.jp/kokusaimondai_archive/2010/2017-12_003.pdf

⑧ Yoko HIROSE, Russia's North Korea Policy: The Logic and Dilemma of Assisting North Korea, *The ASAN FORUM*, 査読無, Vol.5, No.6, 2017
http://www.theasanforum.org/russias-north-korea-policy-the-logic-and-dilemma-of-assisting-north-korea/

⑨ 廣瀬　陽子、旧ソヴィエト連邦共和国とロシア：関係はどう規定されるのか、神奈川大学評論、査読無、第 86 号、2017、pp. 101-111

⑩ Yoko HIROSE, Recent Views in Japan Concerning Sino-Russian Relations, *The ASAN FORUM*, 査読無, Vol.5, No.2, 2017
http://www.theasanforum.org/recent-views-in-japan-concerning-sino-russian-relations/

⑪ 廣瀬　陽子、ロシアにとってのシリアとチェチェン：シリア紛争は第三次チェチェン紛争か、国際情勢研究所紀要、国際情勢、査読無、第 87 号、2017、pp. 95-103

⑫ 廣瀬　陽子、英国 EU 脱退の旧ソ連諸国への影響、海外事情、査読無、2016 年 12 月号、pp.95-109

⑬ 廣瀬　陽子、中露の狭間で揺れる中央アジア経済制裁、世界経済評論、査読無、Vol.61, No.1、2017、pp.35-43

⑭ 廣瀬　陽子、帝国の落とし子、未承認国家、アステイオン、査読無、84 巻、2016、pp.67-84

⑮ 廣瀬　陽子、北方領土問題の解決を目指して　エストニアとロシアの国境交渉からの示唆、独立行政法人北方領土問題対策協会・調査研究レポート・報告書、査読無、2016
http://www.hoppou.go.jp/research/index/

⑯ Yoko HIROSE, The Complexity of Nationalism in Azerbaijan," *International Journal of Social Science Studies*, 査読有, Vol. 4, No. 5, 2016, pp.136-149

〔学会発表〕（計 9 件）

① Yoko HIROSE, "Russia-Japan Relations: Focusing on the Northern Territories Issue" presented at 18th Aleksanteri Conference "Liberation-Freedom-Democracy? 1918-1968-2018," 2018

② 廣瀬　陽子、ユーラシアをめぐる中露関係、比較経済体制学会第 58 回全国大会、2018

③ Yoko HIROSE, "Japan-Russia Relations: Can the Northern Territories Issue be Overcome?," presented at CSIS Workshop, 2018

④ Yoko HIROSE, "Effects of Ukrainian Crisis on Transnistria: Focusing on the security problem" presented at 17th Aleksanteri Conference "Russia's Choices for 2030," 2017

⑤ Yoko HIROSE, "Russian policy for Post-Soviet unrecognized states and regions: Similarities and Differences," presented at Aleksanteri Institute, Visiting Fellows research seminar, 2017

⑥ Yoko HIROSE, "Russian Policy for the Unrecognized States After the Ukrainian

Crisis,”presented at International Seminar - DIALOGUE BETWEEN JAPAN AND FINLAND ON RUSSIAN POLITICS AND ECONOMY, 2017

⑦ Yoko HIROSE, Russian policy for the Unrecognized States after the Ukrainian Crisis: focusing on the Transnistrian problem,” presented at IOS Writer's Workshop “Special Issue: Post-Soviet Conflict Dynamics and Changing Discourses,”2017

⑧ Yoko HIROSE,“Russian Development Policy for Russian Far East,” Third Policy Dialogue on International Cooperation in the Development of Russia’s Siberia and Far East, 2017

⑨ 廣瀬　陽子、未承認国家の誕生と存続：帝国・連邦の遺産、日本国際政治学会 2016 年度研究大会、2016

〔図書〕（計 5 件）

① 廣瀬　陽子、ちくま新書、ロシアと中国：反米の戦略、2018、256

② 廣瀬　陽子［編著］、明石書店、アゼルバイジャンを知るための 67 章、2018、432

③ 廣瀬　陽子 他、勁草書房、メガ FTA と世界経済秩序：ポスト TPP の課題、2016、148–161

④ 廣瀬　陽子 他、明石書店、ロシアの歴史を知るための 50 章、2016、346-352

⑤ 廣瀬　陽子 他、名古屋大学出版会、黒海地域の国際関係、2017、215-244 および 272-293

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ

(1) ヘルシンキ大学アレクサンテリ研究所の研究者紹介サイト：
http://www.helsinki.fi/aleksanteri/english/fellowship/Hirose.html

(2) ヘルシンキ大学アレクサンテリ研究所の「アレクサンテリ・インサイト」での拙稿：
https://www.helsinki.fi/fi/uutiset/talous-yhteiskunta/venajan-tavoitteet-ja-pyrkimykset-pohjois-korean-politiikassa

６．研究組織

研究協力者

〔主たる渡航先の主たる海外共同研究者〕

研究協力者氏名：ハンナ　スミス

ローマ字氏名：Hanna Smith

所属研究機関名：ヘルシンキ大学

（現在、The European Centre of Excellence for Countering Hybrid Threats）

部局名：アレクサンテリ研究所　（現在、Strategic Planning and Responses

職名：研究者　（現在、Director）

〔その他の研究協力者〕

研究協力者氏名：アンナ　コルホネン

ローマ字氏名：Anna Korhonen

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。